
愚者の石

川崎ゆきお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚者の石

【Nコード】

N0469M

【作者名】

川崎ゆきお

【あらすじ】

敷島は禅問答は苦手だった。

敷島は禅問答は苦手だった。

しかし会長の質問はそれに近かった。ある返答をすることで幹部社員になれたりなくなったりするのも腑に落ちない。

会長の質問は簡単そうにみえた。

賢者の石と愚者の石があり、どちらの石を持ちたいかというものだった。現実にはあり得ない話で、そんな石が存在するはずはない。そのため敷島は問いかけそのものがおかしいと答えたかったのだが、それは選択肢にはない。

「愚者の石が選びます」

「愚か者になるということか？」

「はい」

「理由は？」

「私は愚か者だと常日頃思うことで、賢い人の意見を聞いたりする謙虚な心を持ち続けられると思うからです」

「愚者では幹部にはなれん」

敷島は選択に失敗したことになるが、やはり腑に落ちなかった。

久坂は賢者の石を選んだ。

「より聡明になりたいからです」

「では賢者とは何かね？」

「賢い人です」

「賢い人とは何かね？」

「聡明な人です」

「聡明な人とは何かね？」

「賢い人です」

無限ループのような問答が繰り返された。

既に数十回続いている。

「もういい」

会長は根負けしたのか、そこで問うのをやめた。
久坂も不合格だった。

松尾はどちらかもう貰いたくありませんと答えた。
しかし、それは選択肢になかった。

松尾は会長の論理パターンを読み取ろうとした。既に敷島と久坂から予備知識を得ていた。

「両方いただきます」

それも選択肢にない。

つまり、どちらかの石を選ばなければ幹部になれないのだ。

「幹部になりたくはありません」

「どうしてかね」

「気苦労が多そうなので」

会長は笑い出した。

「苦労を厭うようでは幹部にはなれん」

松尾も不合格だった。

三人が話し合った結論ははっきりしていた。

会長を辞任に追い込む作戦を実行していくというものだった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0469m/>

愚者の石

2010年10月9日18時45分発行